

Title	日吉臺古墳發掘豫備報告
Sub Title	
Author	森, 貞成(Mori, Sadashige)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.2 (1931. 6) ,p.176(334)- 179(337)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310600-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヤクトト族に關する文献一般 三、ヤクトト族研究家の傳記 四、信仰 五、俗話 六、言語 七、人類學 八、歴史 九、統計 十、醫藥、疾病 以上の如く文献を分類して居る。只遺憾とする處は氏は本書に於て著者順索引及び地理的分類を付さなかつたこと、ロシヤ以外の文献に關しては必ずしも完璧と云ひ得ないこと及び分類に於て數個所首肯し難き處があることである。(小島武男)

B. Ia. V'adimirtsov. Sravnitel'naia gram-
matika mongol'skogo pis'mennogo iazyka i
kalkaskogo narech'ia. Vvedenie i fonetika.

ベ・ヤ・ウラディミルツォフ「蒙古文語と
カルカ方言との比較文典。」

ウ氏は現今ロシヤに於ける唯一の蒙古語學者で本書は氏の近業であつて、内容は主として蒙古語概論及び音韻のみを述べて居る。序論に於て氏は、既に西歐の學徒シユニミット、ポブロウニコフ、コヴァレウスキー、コトヴィツチの諸氏によつて蒙古語文典は屢々公にされて居るが其等は單にカルカ方言を扱つたもののみである」と説いて居る。氏は蒙古語發達史の項に於て古代、中世、過渡期、現今の諸時代に分ち更に其の時代に於て他民族との交渉によつて影響した處を詳細に説明して居り又現今各地に行はれて居る方言を精確に分類して居る等未だ此くの如き大著を見ないのである。又金石文、古文書を總括的に時代によつて分類し、其等に對して翻譯、研究論文等の文献を付して居り、音韻の部に於ては

單にカルカ方言との比較のみならず、四圍の諸民族の言語との音韻關係を説き、音韻史的にはウイグル、古蒙古語又はサンスクリット、ソグドの諸語と比較して居る。音韻の説明については全てに首肯し難いが(例へば t 及び d の混用の如き)材料の乏しいウイグル、ソグド語との比較研究の如き一朝一夕になしうるものではないと思ふ、この點氏の勞を大いに多とすべきであらう。(小島武男)

彙 報

日吉臺古墳發掘豫備報告

昭和六年五月三十一日(日曜日)晴。

午前八時東横線日吉驛前集合、塾長以下教員學生三十二名、他に塾員等二三の來會者あり。

發掘せんとする第一號古墳は日吉驛より東北方約二丁、慶應義塾敷地内なる丘上に所在する高さ約二米突、東西直徑約十三米突、南北直徑約十二米、周圍に約一米突内外の高さある中段を有する圓墳にして、例へば恰かも鏡餅を見るが如き形を呈せり。墳上には楮、棕櫚其他笹類雜草の繁茂を見る。

午前八時三十分頃より人夫二名を督して發掘に不便なる雜木雜草の除去作業を始む。次で愈々東方より西方へ向け約一米突の幅を保ちつゝ古墳に鉄を入る、學生も亦各々シャベル、スコップの類を手之を手傳ふ。掘ること一時間餘にして赤土(墟母層)現は

る。赤土は古墳形成當時の地肌にして、それより以下に於ては遺物の存在なき爲め更に掘り下ぐる勞を要せず、専ら赤土の現はる



第一圖 日吉臺第三號古墳

を目標として古墳中央に掘り進む。一方に於ては古墳の外廓を爲す漆即ち環隍の形狀を検査す可く古墳の東部に當る——古墳の境を距る約一米突の點——地表を掘る。同じく赤土を探りて掘る

に古墳中央より五米突餘にして、一米突餘の幅員を有し、深さ五



第二圖 同古墳内發見の鐵刀と粘土標

十種餘の漆を發見せり。次で之が圓形なりや或は方形なりやの判

定を得んが爲め南北に向ひて試掘す。その間土器の小破片十餘に餘る出土あり、中には高杯の一部も現はる。

正午一旦休憩。休息約一時間にして再び發掘を續行す。午後よりは人夫一名を増員して能率の増進を圖る。

既にして古墳中央まで掘進みしも別段特異の出土品なきを以て専ら環隍の形式發見に務む。爲めに試みに古墳東北隅に當る地點を掘るに方形を想像せしむ可き形狀に赤土を發見せり。依て更に古墳中央部より北方に向ひ試掘せしに東北隅の赤土地點と合致す可き想定線上に赤土——然かも濠を爲す——を發見す。されど試掘は一部分に止まり果して東北隅に於て方形を爲すや否やの判定は不能にして未だ何等確定す可き成果を見ずして既に暮刻に迫られ再度の精査を待まざる可からざるに至り、惜しくも此の日の發掘を一旦中止し、五時三十分頃解散せり。

六月七日(日曜日)晴。

第二回の發掘を試む可く前回同様午前八時日吉驛前集合、會者すべて熟長共三十名。

第一號古墳は橋本教授の下に學生一名、人夫四名が従ひ前回に於て、未解決に終りたる環隍の形式解明の爲め更に精査を行なふ事とし、他はすべて第一號古墳より徒歩にして約十五分、東に距る十丁餘所在の第三號古墳發掘に従事せり。此の古墳は第一號古墳より稍々其の形を大にして、東西の直徑約十六米突、南北の直徑約十四米突、中段を有せざる同じく圓墳にして其の高さ約三米突弱なり。雜木雜草の除去作業を行なふこゝ前回同様なり。今回

は人夫八名を以て之に充つ。

北方より南方(圓墳中央部)に向つて掘る事、其の方法亦同様なり。掘ること約一時間餘にして圓墳頂より北方約五米突、地上一米突餘の點に於て埴輪の根を發見——直徑約十七糎の破片——同處に砂利の混入せるを見た。此處より更に中央部に進むに従ひ、比較的表面に近く二米突内外の間隔内に葺石と思はる、石及び大小の異同あるも埴輪並に土器の破片出土するもの數十に及べり。更に掘れば中央部に於て表面下約一米突半にして粘土層を發見す。蓋し粘土層あるは棺の外廓に接したるものにして必ずや何等か出土す可き豫兆を得て一同の期待する所亦大いなるものあり。

午後及んで専ら粘土層の形狀を知らんとして細心の注意を以て徐々に掘鑿する中遂に午後四時頃に至り、圓墳中心を北方に距る一米突二十糎、表面下一米突二十糎——中心より正北を僅かに西に偏す——の點に於て西方斷面を掘る人夫の鍬に石に非ざる固物を打つ擦音を聞けり。柴田(常惠)講師忽ち「刀」と呼ぶ。一同目捷に之を見れば斷面に約五糎許りの黒色を呈せるもの有り。一同俄かに活氣付き人夫も亦慎重に其の周圍約半坪許りを掘り擴げれば柴田講師自ら竹篋を以て刀の所在す可き箇處を精査さる。一同其の全貌の現はるゝを固唾を呑んで待つ。漸くにして粘土を以て約一米突餘の間隔に木棺の外廓を爲せる中に稍々一方の壁に近く、東北方約十糎の角度に横はる長さ一米突の直刀現はれたり。見れば先きに鍬に觸れたるは柄の先端にして惜しくも曲折せるも鞘は殆ど全く腐蝕して觸るれば土と紛れん程に脆く、纔かに木質の跡を見せ、柄は糸卷柄にして吊具を有せざるものたりしを窺知

れり。直ちに出土状態を寫眞に撮影す。精密なる研究は後日に譲るも、約一千五百年前の遺物を想定され、柴田氏は或は支那傳來品にはあらずやと想像さるゝも後日の研究結果に俟たざれば斷言し得られず。更に此の刀の周圍に他の發見物を求むれども遺憾ながら皆無。遂に之を以て最上の收穫となして先づ今次の二回に亘る發掘を終る事とせり。此の日第一號古墳よりも埴輪の破片出土ありしも其の環隍形式には正確なる斷定を下し能はざりき。されど第三號古墳に於て直刀一振の發掘ありしは此の見學に於て最も意義あり且つ修學上殊に裨益する所大なるものありしを信ずるものなり。

斯くて好箇の得難き經驗と收穫を得たる發掘は同日午後六時を過ぎて終了散會し、出土品は即夜學校當局に其の保管を依頼せり。
(森貞成記)

昭和五年及六年三田史學研究會例會報告

昭和五年及び六年度上半期三田史學研究會に於ける講演者及びその演題を列舉せば左の如し。

- 一月三十日(木)午後一時半、於萬來舍洋間、第九十二回例會
Rinke に於ける世界史の意義……………齋藤成一君
- 初期ローマ帝國に於けるミツラに就て……………篠崎昌夫君
- Magnacarta & Runnymede……………占部百太郎氏
- 一月十三日(木)午後二時半、於萬來舍洋間、第九十三回例會
ローマに於ける Augustus に就いて……………大島巳之助君

P. Smith: Age of the Reformation の紹介……………有賀春雄氏

現代フランスの史學……………間崎萬里氏

二月二十日(木)午後三時、於萬來舍洋間、第九十四回例會並びに卒業生送別會

鎌倉末期に於ける歌道門流の紛争……………犬塚久雄君

フランスア一世の治世とその宮廷……………藤本善夫君

五月八日(木)午後三時、於萬來舍洋間、第九十五回例會並びに幸田先生、新入生歡迎會

戰國武將の婚姻關係について……………小林均三君

備中倉敷事件……………伊丹榮七郎氏

五月二十九日(木)午後三時、於萬來舍洋間、第九十六回例會

ロシアの戰責問題……………田中蒨三君

Beyrut & Balbeck……………占部百太郎氏

Valeriani の活字本に就いて……………幸田成友氏

六月十三日(金)午後二時半、於萬來舍洋間、第九十七回例會

羅馬尼亞に於ける政局……………爲田義雄君

古代希臘に於ける Polis 成因に就いての一私見……………龜井高孝氏

十月二日(木)午後三時、於萬來舍洋間、第九十八回例會並びに幸田博士祝賀會

元祿時代の政治……………片岡博光君

我國上代の紀年に就いて……………橋本増吉氏

十一月七日(金)午後一時、於萬來舍洋間、第九十九回例會